

# 高木仁三郎市民科学基金 第二回(2002年度)助成 完了報告書

提出日：2004年 5月15日

## 1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

氏名(グループ名)	カネミ油症被害者支援センター
連絡先・所属など	〒171-0031 東京都豊島区2-17-4 F/T 03-3982-1498 rei-sato@hh.iij4u.or.jp 共同代表 佐藤禮子 事務局長 藤原寿和 PHS:070-5460-0568
調査研究・研修のテーマ	カネミ油症被害者の健康実態調査と台湾油症被害者との比較調査
研修先の機関・名称など	〒171-0031 東京都豊島区目白3-17-24

## 2. 調査研究・研修の経過

- ・ 02年 8月 日台環境フォーラム(東京)台湾参加者から台湾油症の情報の収集
- ・ 02年12月 カネミ油症女性被害者健康実態調査 アンケート開始
  - ・ 聞き取り調査の継続
- ・ 03年 2月 第2回 高木基金助成決定
- ・ 03年 5月 1985年 台湾油症訪問支援者からの情報収集
  - 5月 台湾訪問の為の下調べ・台湾主婦連合会集会での情報収集・協力者の確保
  - 6月 台湾油症被害者施設訪問の新聞記者からの情報収集と関係者の紹介
- ・ 03年 7月 男性健康実態調査票の作製
  - ・ 配布 約100部、
- ・ 03年 8月 ダイオキシン国際会議(ボストン)への参加・報告
  - ・ 台湾・日本油症研究専門家との交流
- ・ 03年 9月 台湾油症被害者の実態調査
  - ・ 調査票翻訳依頼
  - ・ 調査依頼 30部
- ・ 03年10月 日本弁護士連合会 第46回人権擁護大会(松山)へ被害者実態報告・交流
- ・ 03年10月 台湾主婦連合会集会への参加
  - ・ 日本カネミ油症被害者の実態調査報告
  - ・ 台湾主婦連合へ台湾油症被害者支援の呼び掛け
  - ・ 台湾油症被害者健康実態調査への協力依頼
  - ・ 台湾油症被害者との交流
  - ・ 台湾油症専門家との連携
  - ・ 日台環境フォーラムへの参加要請
- ・ 04年 1月 カネミ油症男性健康被害実態調査 回収40部 ・集計 ・考察
- ・ 04年 1月 台湾油症被害者の実態調査 回収12部 ・集計 ・考察
- ・ 04年 1月 日本弁護士連合会へ「人権救済の申し立て」146名(未成年者10名含む)
- ・ 04年 2月 日台環境フォーラム
  - ・ カネミ油症被害者支援センター 報告
  - ・ 台湾油症被害者の参加・日本専門家、センターとの交流
  - ・ 日台油症研究専門家の参加・交流
  - ・ 調査への協力再依頼
- ・ 04年 4月 報告会の開催 カネミ油症女性・男性被害者
  - 聞き取り調査
  - アンケート調査
  - 台湾被害者の実態

### 3. 調査研究・研修の成果

日本では36年前、台湾では25年前、人類が未だ経験をしたことがない、ダイオキシン・PCBの食中毒は極めて類似した被害をもたらしている事が明確になった。

10年を経て同じ原因から台湾で起きた事件である事自体、理解し難い問題を含んでいるが、今回はその事件の結果、人体に如何なる被害が生じているかに焦点をあてた調査を行った。

両国での面接、検診、聞き取り、アンケート調査の結果、人数的には不十分ではあるが、汚染物質は容易に排出されず、全身病としての症状が現在も明らかにあり、生殖毒性は次世代にも影響していることが判明した。

男性被害者健康実態調査では回答者は少数であったが、胎児性・2世への被害影響に関わる遺伝毒性に関しての疑いを今後は充分研究すべき課題として提起した。

いずれの国の被害者も、長い年月、治療法のないまま、国の対応も支援体制も不十分なまま放置されている。社会的化学物質汚染の人体への影響が問題になって来ている現在、油症研究は次世代にも大きく影響する事件として国をはじめ専門家は再認識し本格的に取り組むべきである。治療法の開発、差別を受け諦めと沈黙の状態の埋もれた被害者の人権救済を、遅ればせながら、全力投球せねばならないことを多くの関係者は再確認した。

両国の本格的追跡調査、疫学調査、研究体制の見直し、診断基準の見直し、被害者の人権救済、地域医療の見直し、埋もれた被害者の救済などに十分に役立てると同時に、国際的には環境ホルモンの人体に与える影響として、ダイオキシン類のTDIの見直しや毒性の発現態様の解明等に油症事件は貢献せねばならない。

今回の調査を基点としてダイオキシン国際会議と日台環境フォーラムにNGOとして参加出来たことは、被害者、支援者、専門家、マスコミ等の人的交流をはじめ、専門家の今後の研究視点の見直しの一助となったことは、運動にとって非常に大きな成果であった。このことは調査のために思い出したくもない辛い体験を語ってくれた被害者への唯一の償いとも言えよう。

調査結果の詳細内容はレポートで報告しているが、今回の研究の成果が再び油症を社会問題として喚起させる発端になったことは事実である。

高木基金からの金銭的支援のお陰で大きな成果を得ることが出来たと同時に、自信と励みと新たな責任を自覚する機会を与えられたことに、センター一同心から感謝している。

・台湾では油症被害者に対しての専門的研究は日本より進んでいる部分はあるが、現地の被害者と専門家の直接的交流は乏しかった。また、支援体制はなく、知る人のほとんどない事件になっていた。しかし、今回の日本からの呼び掛けにより、台湾主婦連の多くの女性が被害者と会い、調査に協力してくれることで実態を理解し、支援の必要性を認識し、日台環境フォーラムを共催するまで積極的に油症問題に取り組みはじめた事は調査の成果と考える。

・2003年秋、日本の油症治療研究班は、初めて台湾の油症研究者を日本に招き、意見交換を行い、今後定期的に交流、情報交換することを決めた。NGOが国際会議で台湾や日本の専門家と交流し、台湾まで調査に出向いたことの間接的成果と考える。

・九州朝日テレビは今回の日台環境フォーラムに両国の油症問題を取材するため同行した。その後再度両国の油症被害者の実態を放映し、問題を提起しているが、このことも今回の研究の成果と考える。

・日本弁護士連合会は第46回人権擁護大会「蓄積する化学物質と見えない人権侵害～次世代へのリスク～」にカネミ油症事件が取り上げた。その報告として油症被害者が現状を訴える機会を得た。その後、次世代を含めた146人が人権救済の申し立てを行った。その気付きには今回の健康実態調査結果の成果が影響している。

#### 4. 対外的な発表実績

- ・03. 8. ダイオキシン国際会議に参加 発表論文名  
Reproductive Effects on 65 YUSHO Women  
～35 years After PCB's/PCDF's exposures～  
Organohalogen Compounds 63 2003  
カネミ油症被害者支援センター 水野玲子
- ・03-4 Vol. 4 『環境ホルモン』 藤原出版  
カネミ油症の女たち ～35年後のダイオキシン被害調査から～ 水野玲子
- ・03. 6. 公衆衛生 第67巻 第6号 医学書院  
カネミ油症健康実態調査報告 ～最大のダイオキシン被害～ 佐藤禮子
- ・03. 10. 月刊「むすぶ」 No. 394  
カネミ油症事件の真実  
～PCBダイオキシン類・人体汚染の影響は世代を超える～ 佐藤禮子
- ・03.3～04. 1. カネミ油症被害者支援センター ニュース 3号～6号
- ・04. 4. カネミ油症女性・男性被害者・台湾調査報告会資料 石澤春美  
水野玲子 坂下 栄
  
- ・03. 10. 日本弁護士連合会 第46回人権擁護大会（松山）被害者実態報告
- ・03. 10. 台湾主婦連合会集会参加・日本カネミ油症被害者の実態調査報告
- ・04. 2. 日台環境フォーラム・カネミ油症被害者実態報告 カネミ油症被害者支援センター

国会委員会質問	7回
省庁交渉	5回
テレビ放送	地方局含め 多数局に多数回
新聞報道	地方版含め 多数紙に多数回
週刊誌	多数誌に多数回

#### 5. 今後の展望

高木基金の支援もあり、今回台湾、日本のカネミ油症被害者の健康実態調査を行い、それを機にダイオキシン国際会議、日台環境フォーラムで被害者 専門家 政治家 支援者 メディアはじめ多くの方々と交流を持つ事が出来た。その結果「油症事件はダイオキシン/PCBの複合汚染被害で予想以上に長期にわたる未知の影響をもたらす」「その社会的影響は未だ終わっていない」ということを共通認識し、社会に発信する機会となった。

引き続き高木基金の支援をうけ、被害者の現在の悲惨な実態をさらに聞き取り調査し、出版報告などを通じて、ダイオキシン/PCB被害の真実は被害者の内なる環境にのみ存在するという謙虚な態度のNGOとして、市民科学者として広く訴え続ける覚悟である。

これ迄築いて来て関係者（被害者 油症研究班 議員 弁護士 行政担当者 マスメディア 海外の専門家 多方面の研究者・専門家 以前の支援者 公害問題の運動経験者 消費者 生産者など）と協力し、全被害者の医療・生活・社会的救済をはじめ、食品の安全、生産者責任、ダイオキシン、PCBをはじめ全ての有毒化学物質の予防原則の徹底、それに伴う生産規制など考えられるあらゆる手段を行って、二度とこのような悲劇が地球上に起きないように人類に発信し続ける。

#### 高木基金への意見

私どものようなまだ組織的には弱体な団体の活動に対しても、助成をしていただけることをたいへんありがたく思っています。基金事業を通じて、日本のNGOの中から「市民科学者」が育っていくことを切に望んでいます。